

# 東京大学史史料室ニュース

第43号 2009・11・30

## 目 次

天皇制と帝国大学－京都帝国大学を中心にして－	2
明治の上京遊学と苦学・挫折に関して－古書史料等を手がかりとして－	4
受贈図書一覧	6
史料室日誌抄録	8

## 本学所蔵史料の紹介



はじめに

帝国大学は1886（明治19）年3月の帝国大学令によって創立された。天皇の発した勅令により誕生したという経緯からすれば、スタートの時点から、天皇制と帝国大学の関係はある程度規定されていたかもしれない。小文では、その関係性について、特に京都帝国大学を中心として、3つの問題を素描する中で考えてみたい。

九鬼隆一の構想

京都帝国大学も、天皇制との関係性はすでに創設前から意識されていたと考えられる。京都に第二の帝国大学を設置しようとする動きは1890年代になって現れてくるが、その中では、帝国博物館総長であった九鬼隆一の「京都大学条例」（1891年8月）が天皇制との関係性を特に記述していて興味深い構想である。九鬼はその第一条で、「京都大学ハ 天皇陛下ノ特別保護ノ下ニ立チ法律上ノ一個人ト均シク權利ヲ有シ義務ヲ負担スルモノトス」（『京都大学百年史 資料編2』）と定め、京都帝国大学を天皇の特別保護下に置き、独立した法人としての権利義務を持たせようとしている。第三条では、「京都大学ハ京都大学基本金ノ利子及授業料其他ノ収入金ヲ以テ維持ス而シテ特ニ 皇室ヨリ下賜セラルル所ノ保護金ヲ経費ニ充ツルコトヲ得」と規定し、資金面でも天皇の保護下に置こうと構想していた。ここからは、天皇の権威によって守られた独立の法人として帝国大学を創設しようとした意図がうかがえる。国家の様々な権力の介入を防ぐため、天皇の特別な庇護が求められたとも言えるだろう。

九鬼の構想は帝国大学（東京）の教官が作成した『帝国大学独立案私考』との類似が指摘されている（『京都大学百年史 総説編』）が、九鬼が福沢諭吉による天皇制の文化的統合論に強く影響を受け、天皇制の権威伸張と文化財保護を結びつけた文化行政を行っていたという事実（高木博志『近代天皇制の文化史的研究』校倉書房、1997年）を踏まえれば、その延長線上として、大学創立を九鬼が構想したことは想像に難くない。九鬼の構想がその後どのように影響したのかは今後の研究課題であるが、京都帝国大学は1897年に勅令209号によって創立され、第二の帝国大学としての歩みを始めることになる。

「臨幸」と「下賜」

天皇制と帝国大学の関係性を語る中でよく出される例は、「恩賜の銀時計」ではないだろうか。東京帝国大学においては、1899年から天皇（もしくは代理）が毎年卒業式に「臨幸」し、成績優秀者に銀時計を「下賜」した。それが「恩賜の銀時計」である。天皇制による学問奨励策の1つと言われる（詳細は中野実『東京大学物語』吉川弘文館、1999年）。

京都帝国大学でも「恩賜の銀時計」はあった。しかし東京帝国大学との間に1つの相違点がある。卒業式に天皇の「臨幸」がなかったことだ。その理由は、東京と京都で地理的に離れていたからのように思いがちであるが、実はそうではない。1900年7月14日に举行された第1回卒業証書授与式では、京都帝国大学は東京帝国大学と同様に成績優秀者2人に対して「賞品」を「下賜」すること、そして「皇族臨場」を政府に請願した。ところがそれに対して、陸海軍大臣から異論が出た。「文部省所管の帝国大学卒業学生に対し、賜賞多きに過ぐ」と。そこで山県有朋総理大臣と田中光顕宮内大臣が協議し、陸軍は士官学校などの7校、海軍は大学校のみに天皇が出席して海軍機関学校と兵学校には皇族が出席、「文部の管轄に属するものは東京帝国大学にのみ臨幸を賜ひ、而して其の賞品は皆前例に依るべきことに内定」した（以上は『明治天皇紀』1900年7月10日条）。つまりは、政府内のパワーバランスから、天皇・皇族の卒業式出席は東京帝国大学に限定され、「臨幸」という京都帝国大学の願いは叶わなかったのである。

その後、京都帝国大学では1905年に卒業証書授与式と創立記念式典を4月1日に統合し、祝式を行うことになった。その場で前年度の優秀卒業生を発表し、東京から派遣された侍従によって「恩賜の銀時計」が「下賜」されることになる（京都大学大学文書館蔵「記念祝式関係書類 自明治31年至大正3年」、『明治天皇記』1905年4月1日条）。

しかし再び1908年に卒業証書授与式が復活する。そして、東伏見宮依仁親王が天皇の代理として京都帝国大学派遣され、随行した侍従の東園基愛によって優秀卒業生に「恩賜の銀時計」が「下賜」された。このあたりの事情については、『明治天皇紀』が「同大学は其の程度全く東京帝国大学と相同じきを以て、本年以降東京帝国大学に準じ、七月を以て卒業式を挙げる

ことと為し、更に文部大臣事情を具して車駕の該卒業式臨幸を奏請す、是に於て是の日親王を差遣し、且基愛をして随行せしめたまふなり、而して自今以後之を以て例としたまふ』（『明治天皇紀』1908年7月14日条）と書いている。東京帝国大学と同様に卒業証書授与式を開催することができないことはすなわち、京都が東京よりも下位に置かれることを意味していたと思われる。そのため、京都帝国大学が東京帝国大学と同等に扱うことを求めたのではないだろうか。その状況を察知した時の文部大臣牧野伸顕が皇族の「臨幸」を要請し、以降皇族が天皇の代理として京都帝国大学の卒業証書授与式に出席、侍従が銀時計を「下賜」することになった。天皇制の権威が、大学の格や地位を決定づけるのに大きな意味を持っていたのである。

このように卒業証書授与式に皇族を招くことは、京都帝国大学にとって一大イベントであった。そのため、その準備や奉迎の仕方も教員や学生へ徹底化されていく（京都大学大学文書館蔵「卒業式関係書類 自大正3年至大正7年」）。この体制は、1918年の学制改革によって、優等生制度や卒業証書授与式が廃止されるまで行われることになる。

#### 「台覧」という行為

卒業証書授与式において、京都帝国大学に到着した皇族の休息所は、幕末に殉難した志士が祀られてその史料などが収蔵された尊攘堂であった。皇族は式に臨む前、この尊攘堂で総長から京都帝国大学の概況についての報告を受け、所蔵品を「台覧」している（京都大学大学文書館蔵「皇室関係書類」など）。こうした行為は、皇族による幕末の志士の顕彰という意味を含んでいると思われ興味深いが、天皇制と帝国大学という小文の目的からはやや外れるので、指摘するだけに留めたい。

「台覧」という行為は、皇族が大学を訪れる時には必ず行われたようである。1925年5月、裕仁皇太子（後の昭和天皇）が京都帝国大学に立ち寄った。京都帝国大学ではこの年から5月に創立記念祝式を開催することになり、それに合わせての来学だった。皇太子が来学して祝式に臨席することで、学内では「総合大学の実を挙ぐ」と評価されたように（『京都帝国大学新聞』1925年5月15日付）、皇太子来学によって京都帝国大学における各学部の連絡提携が進行し、大学としての結束が強化される機会になると考えられていた。天皇制によって大学自体の統合が図られたのである。

この来学時、皇太子に対しては30分ずつ、進講と物品の「台覧」が行われた。そこでは最新の研究成果が報告され、京大所蔵の標本や史資料が「台覧」の対象となっている（京都大学大学文書館蔵「皇室関係書

類 自大正14年至大正15年」）。「台覧」の際は、各教員による説明も行われた。ここではその中で、新村出附属図書館長・文学部教授が説明した「日本近世天主教ノ遺物」に注目したい。具体的な「台覧」物は、「聖フランシス・シャエリウス画像」「聖母十五玄義図」「聖母半身像」「ロレート精舎ノ聖母像」「基督磔刑彫像」「吉利支丹宗門雜録」「どちりいな・きりしたん」「ぎや・ど・ぺかどる」の8点で、新村はこれを「近世文化史ノ研究資料トシテ學術上ノ価値頗ル大ナリ」と皇太子へ説明している。

これらの遺物は、現在の大阪府茨木市に住む藤波大超によって、地元で発見されたものだった。それが創設間もない京都帝国大学文学部考古学研究室へと借用され、研究が委託された（高木博志「茨木キリシタン遺物の発見」『新修茨木市史年報』第4号、2005年）。地元の立場からすれば、帝国大学へ遺物が託されることでその価値が高められることになり、京都帝国大学の立場からすれば、先発の東京帝国大学に追いつくためにも貴重な史資料を数多く収集する必要があった。そして皇太子による「台覧」は、その遺物自体の価値が認められたことを意味するとともに、それを帝国大学において研究する意義を天皇制によって認証されたことを示しているだろう。つまり「台覧」という行為は、天皇制による研究価値の付加という側面を持っていたのではないだろうか。

#### おわりに

以上の3つの例は、天皇制と帝国大学の関係性を端的に示すものだと考える。近代日本においては、天皇制の権威によって、大学の発展や研究の進展、学問の奨励が図られていった。官吏養成の大学としての東京帝国大学に対抗し、学問の発展を基礎に置いた京都帝国大学も、天皇制との関係では変わりなかったと言えるし、むしろ自分から求めることで、その権威性によって京都帝国大学の位置を上昇させようとしていたとも言えるかもしれない。しかし学問を突き詰めていけば、天皇制の権威とは別の可能性が生み出される危険も出てこよう。哲学者久野収の言葉を借りれば、天皇制における「顕教」と「密教」の問題である（久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波新書、1956年）。建前では天皇制の権威＝「顕教」を前提としつつも、本音ではそれを制限的に見る「密教」の二重構造。帝国大学は常に「密教」を表出させる危険性を持つ存在であった。この考察は今後も研究の課題として残っている。

（かわにし ひでや：京都大学大学文書館助教）

明治の上京遊学と苦学・挫折に関して  
—古書史料等を手がかりとして—

谷本 宗生

本年8月、恒例の新宿・京王百貨店で開催された大古書市に昨年に引き続き足を運んだ。この古書市開催の謂われについては、「新宿・京王デパートに進出」青木正美『下町の古本屋』（1994年）419～420頁などに詳しい。古書市に参加して運よく入手することができたなかには、雑誌『学生』第1巻9号（1910年12月）がある。これは、神田神保町にある富山房が「趣味と実益との宝庫として…一種のインサイクロペディアたらしめ、一部も欠かすことの出来ぬ様にする」ことを目的として編集発行した、明治の月刊教育雑誌である。京都大学前にある吉岡書店が、今回の新宿・京王古書市に出品したものであった。雑誌『学生』の表紙をめくると、「悪筆は一生の損」という標語を掲げた、帝国習字速成学会（東京本郷区大学正面前）による習字の通信教育会員募集が目立つ。

いった論文に興味こそそれ、ポケットマネーを叩いて購入した次第である。澤柳は「小学の教育を卒り、中学の教育をも全うし、更に大志を立てて笈を東都に負ひ、或は深く学業を修め、或は確く業務に就かんとするものの、一杯の酒、一女の言に誘惑せられて、多年の勉強の効果を空しくするのみならず、甚しきに到つては、既に高等教育を受けて、社会に相当の地位信用を得たるものも、一旦の過誤の爲めに従来の努力の結果を空しくし、或は囿圀に呻吟するものすらある。」（18頁）と墮落の注意を促している。和田は「多数学生の読書の仕方を調べてみると、其多く読むといふのは書物の冊数の多いのに過ぎぬ。…読書に必要な条件は興味である。興味があつて始めて注意を喚起す。注意して読んで始めて之を深く胸懐に記すに至るのである。…初は一向に面白く感じなかつた書物が幾返も紐かれる間は此上も無く会心のものとなる例は決して稀では無い。読書百遍意おのづから通ず。」（68～72頁）と青年期の読書の効果を述べている。

本年の夏、上記のような興味深い古書史料等をいくつか入手してみたら、明治の上京遊学と苦学・挫折に関して相応に学ぶことができたように思う。同季の衆議院選挙をめぐって、ちょうど子育て・教育支援などが百年に一度といわれる不況下で注目されている。なかでも、高等教育費の公的負担の対GDP比は0.5%とOECD加盟国中で最低といわれ、高等教育費の自己負担（受益者負担）といった問題は近代教育史上も重大である（谷本「学歴と教育費負担」北野秋男編『わかりやすく学ぶ教育制度』59～61頁、2006年）。東京・高円寺で古書店を開業する直木賞作家の久根達郎も「本というものは、たとえば、せいぜい百部か百五十部作られた饅頭本でも、「狂歌連銭草」の例の如く、六十年後の読者を得るのである。私のような戦争を知らぬ世代が、江戸の名残りの文芸を、感心して読むのである。人は書物でしか生きないことがわかる。書物によって何百年も生き続けることがわかる。「人は地上にあり」地上に生きている者が、書物に生きる人を読むのである。」（『人は地上にあり』291～292頁、2002年）と主張しているが、古書史料をとおして現在の読者が自らの歴史的な位置付けを改めて実感できるのではないかと考える。

郷里の福岡・豊津から上京した堺利彦（1870～1929年）の自伝『堺利彦伝』（1978年）を読むと、「中学校の卒業生は大抵みな東京に遊学することを望んでいた。…とにかく私は意気揚々として故郷を出た。時に明治

ふ乞を記附御る據に告廣生學は方の文註御

# 悪筆は一生の損

「兄さん大變お上手に書けるとね」「誰でも書けるよ」

「僕はね…亦文字が現はれて、すぐ消えるのが面白いわ」

東京本郷区大学正面前  
電話下谷 三〇壹番番  
三貳一〇番

帝國習字速成學會

▲見本詳細會則無代進呈

▲本會書者兼講師

稲川雲 谿先生  
玉木愛 石先生  
小野鷲 堂先生  
外講師大家數拾名

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる悪筆にても最も短日にて上達すること之迄の卒業の成績に依て證明されて居る

さらに目次をみると、澤柳政太郎（貴族院議員）「修養は難く墮落は易し」（15～20頁）や、和田万吉（東京帝国大学図書館長）「如何にせば図書館は有益に利用し得らるる乎 皮相的多読を避けよ」（67～72頁）と

十九年春四月。十七歳。…たしか十八の冬であったろうと思うが、忘れもせぬ、眼鏡橋のそばの牛肉屋に、杉元君と横山君と三人で行った時に、彼ら二人はいつの間にか既に吉原の知識を持っていて、その晩、私をその悪事仲間に誘いこむ計画を立てていた。私は不安を感じながらも、あえて親友の勧告を拒絶するものではなかった。つまり、それから遊びということを覚えた。…寄宿舎生活は不便だというので、三人一緒に美土代町に下宿した。…こんなことからして、私たちの酒飲み癖と、遊び癖と、金使い癖とがついた。杉元君と私とは、最下等の成績で辛うじて二年級に進んだが、学校〔第一高等中学校〕の成績などはもう二人とも問題にしていなかった。…金ばたんの外套を嬉しがったりしたのは昔のことで、今は寒空に夏服を着て、ズツクの破れ靴をはいて吉原の廓内をさまよいるいたりした。国で母が丹精して拵えてくれた博多の帯も、奉書の羽織も、糸入の裕も、ことごとく質屋にまげられてしまった。…明治二十二年二月十一日、憲法が發布された。…その時、私は既に、月謝不納の故を以て学校から除名されていた。そして馬場家からは離縁の申込みを受けていた。私は馬場さんに対して、中村家が私を東京に遊学させたのだから、離縁するなら私を国に帰すが当然だという理屈を言って、帰国の旅費を請求した。馬場さんは止むなく旅費として金十円を出し…私は直ちにその十円を飲んでしまった。」(85～109頁)という、当時の上京青年らが辿ったであろう放蕩・挫折過程の一端が赤裸々に記されている。上京遊学を志望する青年らのために、少年園が1890年以降定期的に編集刊行した『東京遊学案内』のなかでも、「交際の注意」として「朋友の全く宜しきを得ざることにて、互に無分別の考へより感化されて相墮落し、遂に其品行を墜し其志を失ひ、相率ひて壯士と通人となり偽紳士となり偽政治家となり似而非博士となつて、周囲の空気を汚すに似たり」(1891年)と強調している。笹川臨風『明治還魂紙』(1946年)には、第一高等中学校の受験に失敗して後、第三高等中学校、帝国大学文科大学をなんとか卒業した笹川の進路選択に、彼の知己・校友関係が影響を与えたことが記されている。「鹿児島島の造士館が高等学校になるので、その教授に行つたらといふ話を先輩の松村文部専門学務局長から慫慂され、鹿児島出身の折田第三高中校長からも頼りにすすめられたが之は実現せず、澤柳政太郎先生の紹介で宇都宮中学校長に赴任することとなつた。」(83頁)。

当時の青年らの多くが上京遊学へと駆り立てられていった事情については、木村小舟『明治少年文化史話』(1951年)に「村の人々さえが、「君のような学問の出来る人は、肥桶担いで田舎の土に埋まるのは惜しいものだ」と、無責任の勧告をするし、日々の新聞や月々の雑誌の広告面には、手を差し出して招かんばかりに、

各種の私立学校、塾、学会などが、成功の冠を与えるように、誇大の学生募集を競う有様、それこそ棚の牡丹餅を受け取るが如く、何でも彼でも、東京え行きさえすれば、成功の道は必ず啓かれるものと、寝ても覚めても、只この事以外に思う所は無かつた。」(53頁)と記されている。緒方流水『学生自活法』(1903年)でも、明治の苦学生らの生活ぶりが詳細に言及されている。苦学生の多くは「三種の職業」(新聞配達・牛乳配達・人力車夫)に従事する機会があったという。そのなかでももっとも多いとされた人力車夫に従事する学生の一人は、「廓の中へ入つたら成るべく楼の前に横付にするのです、そして門の処では下ろさないで楼まで挽いて行つて、威勢よくお客様ッと一声叫びますと、其処は野郎も見えですから余計の金も呉れますし、女郎屋〔ママ〕からは蠟燭を貰へます、何でも横づけに限りますな、神田辺から吉原へ挽いて行けば、僕は三十銭より安く行つたことはありません、時には四十銭位になります、それで帰り車を見つけて来るともう沢山です、で僕は夜の九時頃から出掛て一時頃まで挽きます」(84～85頁)と、職業上の役得を述べている。そのいっぽう、次のような苦学生の挫折した事例も紹介されている。「氏は山梨県の人、明治五年に生る、海軍軍人たらんと希望を抱て、明治二十三年始めて出京す…学資の途は切れたり、生活費にも差支へを来たすこととはなりたり…然らば車夫にならんと夫れよりは夜間車を挽くことにしたるが、馴れざる間は碌に客も取れず、此業は配達よりも疲労甚だしき為め空しく三四月は勉強も出来ずに打過すや…其後は江田島兵学校に入り勉強しつつありしに不幸にして肺炎に罹り、薬石其効を奏せず、遂に返らぬ旅に赴きたり」(169～171頁)。学業上の不振(留年や退学)に加え、肺炎や結核などの疾病、精神的な障害も含めた健康上の問題は今も昔も共通する事柄であると気付かされる。しかし、明治の上京遊学した青年らはたとえ苦学・挫折を経験しながらも、濃厚な交友・人間関係によって自身の生を相応に謳歌したのではないかと感じられる。これからも、学生時代や青年期を記した多くの日記や回顧録・自伝などを読んでいき、いろいろと比較しながら思いを巡らすことができれば幸いである。たとえば、一高同窓会『会報』全49号(1925～1943年)などは貴重な手がかりとして、少しずつでも読んでみたいともっか考えている。明治以降の学生らについては上記のような古書史料等を手がかりとするが、昭和戦後・平成期以降の学生動向については東野圭吾『あの頃ぼくらはアホでした』(1998年)、高野秀行『ワセダ三畳青春期』(2003年)、森見登美彦『四畳半神話大系』(2005年)といった新刊書籍なども注目していくつもりである。

(たにもと むねお：大学史史料室)

## 受贈図書一覧（抄）（平成21年2月～平成21年9月）

一高同窓会会報 第404～第407号 一高同窓会	平成21年2月～8月	全国大学史資料協議会東日本部会 二十年の歩み 全国大学史資料協議会東日本部会	平成21年3月
小樽商科大学史紀要 第3号 小樽商科大学百年史編纂室	平成21年3月	名大史ブックレット 13 名古屋大学大学文書資料室	平成21年3月
神奈川大学史資料集 第二十五集 神奈川大学資料編纂室	平成21年3月	アルケイア－記録・情報・歴史－ 第3号 南山大学史料室	平成21年3月
関西大学年史紀要 第十八号 関西大学年史編纂室	平成21年3月	日本大学史紀要 第11号 日本大学総務部大学史編纂課	平成21年3月
関西学院史紀要 第十五号 関西学院学院史編纂室	平成21年3月	成瀬記念館 No.24 谷本宗生	平成21年7月
京都大学大学文書館だより 第16号 京都大学大学文書館	平成21年4月	広島大学文書館紀要 第11号 広島大学文書館	平成21年3月
京都大学大学文書館研究紀要 第7号 京都大学大学文書館	平成21年2月	大学論集 第40集 広島大学高等教育研究開発センター	平成21年3月
『第三高等学校関係資料』解説・目録 京都大学大学文書館	平成21年3月	武蔵学園史年報 第十四号 武蔵学園記念室	平成21年3月
筑紫女学園百年史 筑紫女学園	平成21年5月	大学史紀要 第十三号 明治大学史資料センター	平成21年3月
啐啄 第49号 日本の教育改革を進める会	平成21年6月	東北大学百年史編纂室ニュース 第14号 東北大学百年史編纂室	平成21年3月
専修大学の歴史 「専修大学の歴史」編集委員会	平成21年9月	立教学院史研究 第6号 立教学院史資料センター	平成21年3月
ものがたり 東北大学の至宝 東北大学史料館	平成21年1月	立命館百年史紀要 第十七号 立命館百年史編纂室	平成21年3月
神陵文庫別冊 新版 神陵小史 三高自昭会三高記念室	平成21年3月	早稲田大学史記要 第四十巻 早稲田大学大学史資料センター	平成21年3月
國學院大學 校史・学術資産研究 第一号 國學院大學研究開発推進機構	平成21年3月	北海道大学大学文書館年報 第4号 北海道大学大学文書館	平成21年3月
成蹊学園史料館年報 2008年度 谷本宗生	平成21年3月	青淵 第七二〇～七二七号 渋沢栄一記念財団	平成21年3月～10月
玉川大学教育博物館 紀要 第6号 玉川大学教育博物館	平成21年3月	アーカイブズ 第35,36号 国立公文書館	平成21年3月, 7月
中央大学史紀要 第十四号 中央大学入学センター事務部大学史編纂課	平成21年3月	龍谷大学史報 vol.9 龍谷大学大学史資料室	平成21年2月
東北大学史料館紀要 第4号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成21年3月	かわら版 第269～276号 谷本宗生	平成21年2月～9月
名古屋大学大学文書資料室紀要 第17号 名古屋大学大学文書資料室	平成21年3月	勸学院の雀 第160～165号 谷本宗生	平成21年1月～8月
開館10周年記念 小杉放菴展（図録） 小杉放菴記念日光美術館	平成19年10月	公文書館専門職員養成課程修了研究論文集 国立公文書館	平成20年度

全国大学史資料協議会西日本部会会報 No.25 谷本宗生	平成20年12月	九州工業大学百年史 通史編,資料編,附録CD 谷本宗生	平成21年3月
学都 No.30～33 谷本宗生	平成21年2月～8月	第13回夏期教育セミナー「伝えたい志がある。残したい想いがある。」-映画「北辰斜にさすところ」に託して- 谷本宗生	平成21年8月
東北大学百年史 十 資料三 東北大学	平成21年3月	佐佐木信綱記念館だより 第23号 佐佐木信綱記念館	平成21年3月
五月祭プログラム 第82回 谷本宗生		桃山学院の歴史 2009 桃山学院史料室	平成21年4月
1880年代教育史研究会ニューズレター 第24～26号 谷本宗生	平成21年1月～7月	平成20年度修士論文 学生の起源-教育における呼称と待遇の研究- 岩木勇作(創価大学大学院)	
研究室紀要 第35号 谷本宗生	平成21年3月	東北大学史料館常設展示ガイドブック 東北大学史料館	平成21年7月
物性研だより 第48巻第4号～第49巻第2号 東京大学物性研究所	平成21年1月～7月	広島大学文書館所蔵 旧制広島高等学校資料目録 広島大学文書館	平成20年10月
UP 436号～443号 東京大学出版会	平成21年2月～9月	平成二〇年度総長裁量経費プロジェクト『吉田寮関係資料』解説・目録 京都大学大学文書館	平成21年3月
大学アーカイヴズ No.40 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会	平成21年3月	慶應義塾創立150年記念 未来をひらく福澤諭吉展(図録) 慶應義塾福澤研究センター	平成21年1月
世界の有力大学の国際化の動向 2007年11月調査報告 東京大学本部国際系国際連携G	平成19年11月	横浜開港150周年記念 横浜中華街150年-落地生根の歳月(図録) 横浜開港資料館	平成21年7月
東京大学理学系研究科・理学部ニュース 40巻6号～41巻3号 東京大学大学院理学系研究科	平成21年3月～9月	東京大学大学院教育学研究科・教育学部 自己点検・外部評価報告書 谷本宗生	平成21年3月
慶應義塾福澤研究センター通信 第10,11号 慶應義塾福澤研究センター	平成21年3月,8月	宮城学院最近10年史 1997-2006 宮城学院	平成21年3月
九州大学大学文書館ニュース 第32号 九州大学大学文書館	平成21年3月	大東文化歴史資料館だより 第6号 谷本宗生	平成21年5月
緑丘アーカイブズ 第9号 小樽商科大学百年史編纂室	平成21年3月	ニューズレター明治大学史 vol.5,6 明治大学史資料センター	平成21年2月,3月
東北大学史料館だより 第10,11号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成21年3月,9月	資料で読み解く 南原繁と戦後教育改革 山口周三	平成21年1月
名古屋大学大学文書資料室ニュース 第26号 名古屋大学大学文書資料室	平成21年3月	写真集 慶應義塾150年 慶應義塾福澤研究センター	平成20年11月
大学史資料室ニュース 第13号 大阪市立大学大学史資料室	平成21年3月	慶應義塾150年史資料集 別巻1 慶應義塾福澤研究センター	平成20年11月
大阪大学の歴史 大阪大学文書館設置準備室	平成21年3月	青春群像 さようなら六本松 一九二一福高-九大二〇〇九 九州大学さようなら六本松記念誌編集委員会	平成21年2月
立教学院150年史資料集 第1巻 立教学院史資料センター	平成21年3月	東大医昭和三十四年卒業記念誌 三四郎会の五十年 谷本宗生	平成21年3月
創世 第36号 白井 厚(慶應義塾大学名誉教授)	平成20年11月	東京大学整形外科学教室百年史 東京大学整形外科学教室	平成20年4月
【資料】戦後熊本における「総合大学」設置運動-「熊本大学期成会資料」の紹介(抜刷) 熊本大学60年史編纂室	平成21年3月	神奈川大学創立80周年記念誌 神奈川大学80年のあゆみ 神奈川大学資料編纂室	平成21年7月

## 史料室日誌抄録（平成21年2月～平成21年9月）

- 2月9日（月） 『明治期帝大法科生講義ノート』（全69冊）デジタル化完了納品。  
2月20日（金） 第66回史料保存委員会開催（本部棟3階財務入札会議室にて）。  
2月27日（金） 谷本室員、1880年代教育史研究会参加（高円寺にて）。  
3月17日（火） 『諸向往復』の中性紙箱詰め整理作業完了。  
3月24日（火）～3月26日（木）  
『東京大学史史料室ニュース』第42号刊行、発送。  
『東京大学史紀要』第27号刊行、発送。  
3月27日（金） 谷本室員、第1回女性研究者支援研究会参加。  
3月31日（火） 科研費書類デジタル化（第1期分）完了納品。  
4月18日（土） 谷本室員、第2回女性研究者支援研究会参加。  
5月29日（金） 谷本・柏木室員、「矢内原総長展」見学（駒場博物館にて）。  
6月4日（木） 谷本室員、九州大学百年史編纂の意見交換。  
6月26日（金） 科研費書類デジタル化（第2期分）完了納品。  
7月2日（木） 大学産業医巡視訪問。  
7月3日（金） 谷本・瀬川室員、総長室より文献史料等の受入。  
7月10日（金） 谷本室員、橋本鉞市教授（教育）と松本記念館セミナー打合せ。  
8月18日（火） 谷本室員、松本記念館セミナー打合せ（京都・国際高等研究所にて）。  
8月27日（木）～29日（土）  
谷本室員、日本教育学会大会参加（駒場にて）。  
8月30日（日）～8月31日（月）  
谷本室員、夏期教育セミナー司会（松本市あがたの森文化会館）。  
9月4日（金） 『創立百年記念 東京大学石版画集』デジタル化完了納品。  
9月15日（火） 谷本室員、東大新聞社の取材対応（「東京大学新聞」9月29日発行分）。

### この間の閲覧者数

学内者 11名  
学外者 28名

### 主な学外閲覧者所属機関

麻布高校、埼玉学園大学、早稲田大学大学院、慶應義塾大学大学院、日本大学  
学習院大学大学院、日本女子体育大学、釧路公立大学、群馬大学大学院、近畿大学  
香川大学、東北大学、筑波大学、立教大学

### その他

文献撮影・複写許可件数 31件  
調査（照会）件数 48件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第43号

発行日：2009年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2